

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

意気高く槍の穂先に立つ その2

大天荘のブログで榊さんは下の写真とともに次のようにコメントしてくださいました。
「このような天候にもめげず、昨夜宿泊された長野県は大町市内にある大町高校の生徒



さん達が、元気よく槍ヶ岳方面に向かって出発して行きました。学校開校100年以上にもなる歴史ある高校、毎年7月には全校登山という、山岳文化都市の学校にふさわしい行事があり、その中の一隊が毎年ここ大天荘に宿泊され、翌日槍ヶ岳へ目指していきます。ここ数年、なかなか天気に恵まれない中お見え頂くことが多いのですが、“憧れの槍ヶ岳に登るんだ!”という強い意志は、雨風を物ともせず。頼もしい限りです。晴れていれば槍・穂高連峰を仰ぎ見ながらの気分良い縦走が楽しめたであろうに・・・などとしんみりするには及ばず。足取り軽く喜作新道へ。湿っぽい天気、気分が滅入りそうでしたが、若い彼らの体全体にみなぎる活力・パワーを少しわけてもらったような、ある意味清々しい気分にさせてくれた彼らの見送りの図でした。「大町高校」としての全校登山は今年度が最後。来年度は

別の高校と再編統合され、新たな高校名で登山行事が存続する見通しです。」

今年は同窓会からヘルメットも揃えてもらったので、全員に装着させ、気持ちも引き締めて出発する。さて、大天を出た我々一行は、足元の美しい花たちに心を慰められながら、西岳を目指して喜作新道を進む。途中からは長堀山経由で徳沢へ下る蝶隊とも交信する。雨のため、途中一本取ったのみで、8:30に西岳に到着。ここで情報を仕入れ、雷の心配がなさそうなことと、風がそれほどでもないのもそのまま前進することとする。ここからの水俣乗越までの下りは今日の核心部。生徒には改めて雨に加えて落石、滑落等への注意喚起をして踏み込んだ。雨は、次第に強さを増し、ゴアのカップでも中はぐしょぬれ。生徒の消耗も激しいに違いない。しかし、弱音を吐くものはだれ一人いない。

「槍に登るんだ」という思いからだろうか、それともこれが「大町高校の誇り」や「連綿と受け継がれてきた伝統の力」なのだろうか。単なる個人の力の合計を越えた、総合的な力が発揮されていると感じた。水俣の下り、その後の三連梯子を越えれば、あとはジリジリと登って行く。

ヒュッテ大槍では昼食を摂った。しかし、食事を終えて、再度濡れた冷たいカップを着て外へ出たときは、さすがに一瞬怯んだ。まさにシャワー状態の激しい雨に、生徒たちと顔を見合わせて、思わず笑うしかなかった。しかし、肩の小屋まではあと40分だ。ヒュッテで乾いたタオルを貸していただき、濡れた身体を拭き、温かい食事から内部から

エネルギーを補給した生徒たちの様子を見て、行けると判断した。隊は、最初からずつと、先頭をOBのHさん、しんがりを私以外の2人の大人という構成にして、僕は遊軍的に全体の動きを見ながら、適当な位置にはいつ進んできた。数人の生徒が寒いと訴えていたので、低体温症に注意しながら進む。高所については、昨日大天で約3000mを経験しているので、まず問題なからう。そんな風に生徒たち一人一人の様子を見ながら判断していくのは、集団登山の隊長としては最も重要な任務だ。しかし、雨は激しいものの、この吹きさらしの稜線でも幸いなことに風はそれほどでもないし、落雷もない。

あと500m、200m、100m・・・小屋までの距離を書いたペンキを見て、「平地なら20秒、10秒じゃん」と軽口も飛ばす元気のある生徒たち。12時40分、槍ヶ岳山荘着。穂苅さんに「穂先まで行ってきます」と伝えて、昨日同様濡れ鼠のまま、頂上を目指した。足が攣りそうだという自己申告をしてきた生徒を一人だけ残し、残り23名で登った。さすがに飛騨側からの風は強く、冷たかったが、頂上を我々だけで独占した。68回目を迎えた伝統ある全校登山の最後の登頂は、決して簡単なものではなかったが、それだけに生徒の思いも一入だったのだろう、思いのこもった山岳部歌を一緒に歌うことができたのは、幸せだった。山頂から下りると、何人かの生徒が寒いにも関わらず、抱き合って喜んでいるのを見ると、なんだか僕もウルウルしてきてしまった。困難の先にあるもの、何も言わなくても生徒たちは自分の手でそれをつかんでいる。晴れたら明日も登ろう、そう生徒と誓っていたのだが、結局、翌日も前日以上の激しい雨。

槍ヶ岳山荘でも我々の様子をブログで次のように紹介してくれた。「写真は長野県立大町高校の皆さんです。昨日、悪天候のなか表銀座を縦走してやってきました。毎年この時期の恒例行事。来年は学校統合で、学校名は変わるそうですが、槍ヶ岳登山は続ける予定とのこと。今日は、テント泊や小屋泊まりで多くの高校生がやってきました。いよいよ、そんな季節になったんだという感じです。」大町高校の学校登山は、山小屋にとっても年中行事のようなもの。雨の中、社長の穂苅さんと記念撮影をし、槍沢を元気に下る。

槍沢ロッジに着いた頃、上高地の方に青空が見え始め、ようやく雨が上がった。とはいうものの、最後まで槍ヶ岳はその姿を見せてくれなかったのが残念。横尾からは隊列を解き、自由に上高地まで歩かせた。・・・最後に到着した僕らを待ちかねた生徒たちは、なんと梓川に飛び込んで、せっかく乾いた身体を頭の上から足の先までもう一度濡らし、何の憂いもない天真爛漫な姿で僕らを出迎えてくれた。まさに童心さながら、感動をそのまま全身で表わして。「槍ヶ岳、どうだった？」そんなことは聞くだけ野暮。

